富山県滑川市

安田古宮遺跡

発掘調査報告書

1978

滑川市教育委員会

発刊にあたって

滑川市の東南は丘陵地帯となっており，この台地上から，いままで縄文時代の遺跡や遺物がたびたび発見されて，本市の原始文化を知るうえで大切な資料が，数多く得られていました。

このたび，室山野台地末端にあります安田地内において，富山中部地区広域営農団地農道（スーパー農道）整備事業にともなう事前発掘調査が，金沢美術工芸大学講師小島俊彰先生のご指導により行なわれ，滑川市としては最も古い時代に属する縄文時代前期の土器が出土しました。

これは郷土の歴史を考えるうえで，新たに知ることのできた，たいへん意義ある資料であると存じます。

ここにその資料をまとめて報告書を刊行し，関係各位のご参考に供する次第であります。

なお，この発掘調査には，富山県富山農地林務事務所ならびに富山県教育委員会のご援助を賜わりましたことを，深く感謝申しあげます。

また，炎天下発掘作業に従事された皆様には，心からお礼を申しあげます。

昭和53年2月

滑川市教育委員会

教育長　毛　利　隆　司

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1

Ⅱ　調査に至るまで……2

Ⅲ　調査の経過……2

Ⅳ　遺　構……3

Ⅴ　遺　物……4

1．土　器

2．石　器

Ⅴ　ま と め……11

例　言

1．本書は，昭和52年度富山県埋蔵文化財包含地発掘調査委託事業として，滑川市教育委員会が行なった，滑川市安田古宮遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査期間は，昭和52年7月27日～29日，8月19日～26日で，前期は富山県教育委員会文化課が，後期は滑川市教育委員会が実施した。

3．発掘調査員は，金沢美術工芸大学講師小島俊彰氏（滑川市史執筆委員）にご依頼した。

発掘作業には，金川三郎氏（東金屋）のご配意による地元作業員のほか，滑川市史編さん係の職員があたった。

4．本書の執筆は，主に小島俊彰氏が行ない，一部を滑川市史編さん係長金子忠雄・同主事松井幸雄が担当した。第Ⅴ章2の玦状耳飾の項は，富山考古学会の藤田富士夫氏に執筆をお願いした。編集には，滑川市史編さん係の職員があたった。

Ⅰ　遺跡の位置と環境

安田古宮遺跡は，滑川市安田字古宮割及び小鹿野字大南に所在する。

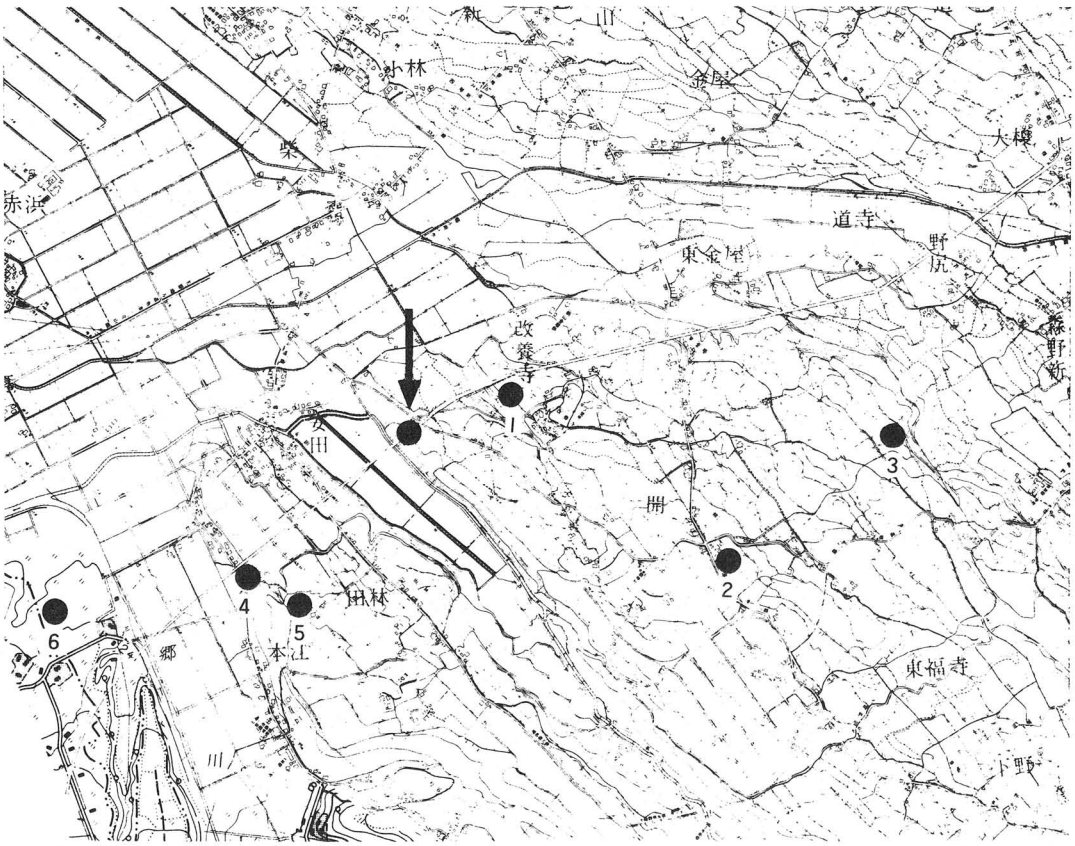
滑川市は，早月川によって形成された複合扇状地にある田園都市である。

地形は，早月川と小早月川との合流点近くを扇頂として，東南から北西に向い，半開きに広がる扇状を示す。東南は旧扇状地（洪積世の隆起扇状地）が，北西は新扇状地がそれぞれ占め，新扇状地末端は富山湾に面する。

発達した旧扇状地は，早月川寄りは急な段丘崖となって新扇状地に接し，西の上市川方向に延びる台地は，ゆるやかな勾配をもって平野に連なる。この旧扇状地はまた堆積の新旧によって３期に分けられ，安田古宮遺跡は最後に形成された台地上の西末端に近い。台地の南側は，東から西に流れる高知川によって深く開析され，およそ７ｍの段丘となって東福寺野台地に対峙している。遺跡は，高知川を脚下に望む辺縁にある。標高は約43ｍである。

なお，現在の安田神社は，東福寺野台地末端近く，字大井に鎮座しているが，江戸時代には，遺跡所在地付近にあったのではないかと，土地の人々に伝えられており，字古宮割とともに瓦の出土がそれを裏付けているともいえる。

本遺跡の周辺には，①藤山遺跡（縄文中期）②小鹿野遺跡（縄文前期）③森野谷遺跡（縄文晩期）〔1975滑川市教育委員会〕④本江石山遺跡（縄文中期）⑤田林遺跡（縄文中期）⑥本江広野新遺跡（縄文後期～古墳前期）〔1972富山県教育委員会他〕などがある。



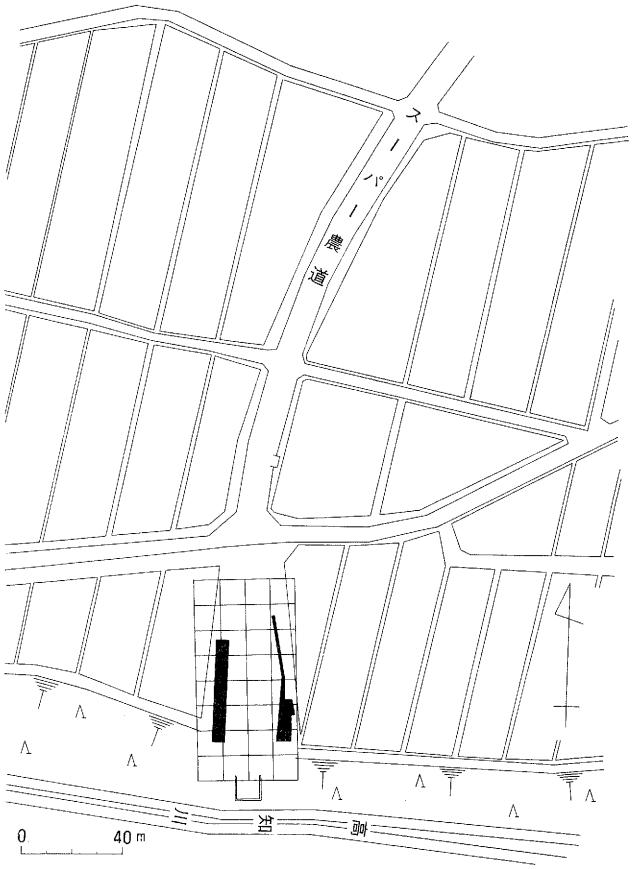
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡　Ｓ＝１：25,000

II　調査に至るまで

高速自動車国道北陸自動車道富山市・朝日町間建設予定ルートが，昭和48年３月発表され，富山県教育委員会では，路線周辺の埋蔵文化財包蔵分布調査を，予定路線の100ｍから１㎞の範囲の幅員にわたり行なった。

いっぽう，滑川市内において，富山中部地区広域営農団地農道（スーパー農道）の建設が，昭和45年度から実施されていたが，安田地内において，未着工の部分が残されていた。

この路線内部分の土砂の一部を，土木業者が採集し，地山が露頭していたところ，たまたま，前記調査による踏査観察によって，縄文時代前記後葉に属する土器細片が表面採集され，断層面にはピット状のくぼみがみられ，遺跡の存在が確認された。



第２図　遺跡周辺現況図

昭和50年５月，県教育委員会から通報を受けた滑川市教育委員会は，富山農地林務事務所に対し，工事着工の場合の事前協議の取決めを申し入れるとともに，現状の保護をはかった。

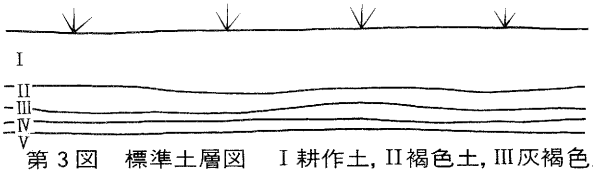
昭和51年10月，遺跡の所在する台地と東福寺野台地を結ぶ橋げたを支える橋杭工事が行なわれ，段丘崖に橋杭を構築したが，このとき遺物包含地の土砂がかなり移動されていることを翌52年春知り，工事の中止を求めるとともに，各関係機関の協議によって，夏期に発掘調査を実施することが決ったのである。

III　調査の経過

発掘調査は，昭和52年７月27日から同月29日にかけておこなわれた富山県教育委員会の試掘調査のあとを受けて，同年８月18日から同月26日にかけて実施された。

18日は，雨のため現場において試掘調査担当者の県教委上野章，酒井重洋両主事と小島，金子，松井で打合わせをおこなった。その際，表面観察中道路西側において玦状耳飾の破片を採集した。なお遺跡の主体部と思われる部分は，工事によりすでに破壊されており，調査区はその両側の幅約５ｍずつに限られた。

19日から本調査にはいり，基準杭及びグリッドの設定をおこなった。道路中心線に直交してＸ軸，平行してＹ軸とし，数字の一連番号を付してグリッドを表示した。道路西側区は県教委の試掘調査により地山面まで排土されており，遺構を確認した段階で道路東側区に調査の主体を移した。



第３図　標準土層図　Ｓ＝1/40　Ⅰ耕作土，Ⅱ褐色土，Ⅲ灰褐色土　Ⅳ褐色土，Ⅴ赤黄色（ローム）

20日は，道路東側区トレンチの拡張を開始した。地表から50cm程で地山に達したが，遺物はX18Y15区から縄文式土器がまとまって出土した。他にX19Y 9・10の落ち込みの底面や表土中から瓦の破片が数点出土したが，これはもとこの地にあった安田神社に使用されていたものであろう。

22日は，X18Y15区の縄文式土器の出土状況の写真撮影と土層断面図の作製をおこない道路東側区の作業を終える。

23日には，道路西側区で確認していたピット状遺構の掘り下げをおこなった。このうち④,⑤,⑥は地山に30cm～40cm掘り込まれており底部は平らで，壁はまっすぐ内傾して立ち上がり，炭化物を含む茶褐色の埋積土を持つものである。遺物は⑥の埋積土中から縄文式土器片が1点出土したのみである。

26日遺構の写真撮影及び平面図の作製をおこない発掘調査を終了した。

Ⅳ 遺　構

土拡を7個検出した（第4図）。

東側区の土坑は，X19Y12区に検出したピット7で，半掘で終わった。ゆるい傾斜の掘り込みで直径70cm深さ30cm，遺物はない。

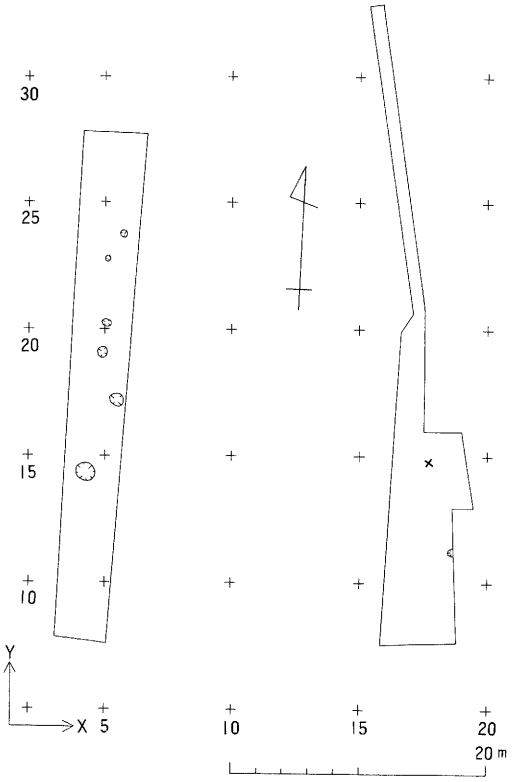
西側区の土坑は，X6Y24区のピット1からX5Y15区のピット6まで，2mから4mの間を置いて検出した（図版2）。

ピット1～3には黒色土が，同4～6には炭化物を混じえた茶褐色土が埋まっていた。遺物は，ピット6で土器片（第8図8）が発掘されたのみである。

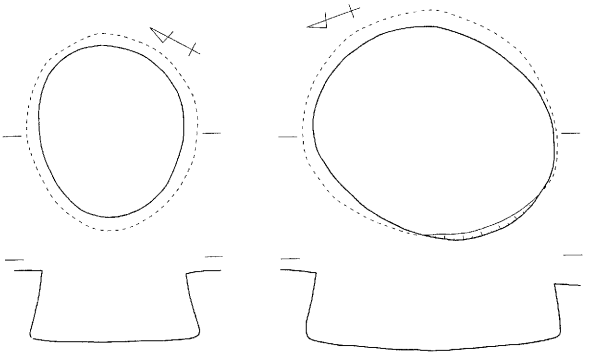
ピット2は，30×45cm（深さ10cm）の楕円形だが，他は円形で坑底が口部よりも広く，弱い袋状の掘り方になっている。口径は，ピット1が65cm，ピット3が60cm，ピット4が80cm，ピット5（第5図）も80cm，ピット6（第5図）は110cm×130cmとやや大型である。

これら土坑の所属期は，次章で記すように本遺跡出土の土器がほとんど縄文時代前期末葉に限られていること，またわずか1点ではあるが，ピット6中から前期末葉の土器片を得ていることから，同前期末葉を推定してよいであろう。

このような土坑は，県内では立山町吉峰遺跡や富山市古沢遺跡に類例があって，



第4図　調査区全体図



第5図　土坑実測図　左 ピット5　右 ピット6　S＝1/40

その多くはやはり前期末葉の位置が与えられている。〔柳井・神保1975，小島幸1977〕。

V　遺　　物

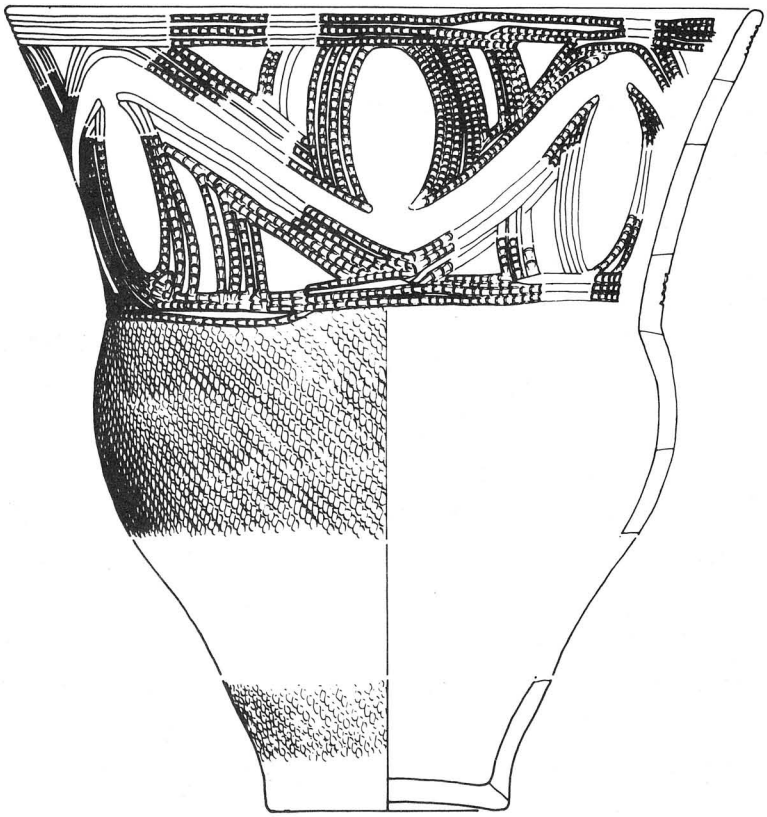
1．縄文土器

A　出土土器について

当安田古宮遺跡出土の資料は，X18Y15区でまとまって出土した以外は，小片が個々所々に出土したのみであった。[注1]

まずX18Y15区の，一括資料をみよう。ここでは，3個体の土器が認められた。第6図はその中で最もまとまっていたもので，口辺部に欠失部分はあるがほぼ一周し，底部も残っているが，胴中央から下部にかけては全く残っていない。器形は，ゆるく外反する口辺部からやや張り出した胴部へ，さらにすぼまって胴下部へと続くものである。

胴部には，RLの縄文が転がされ，幅広で外反した口辺部には沈線爪形文で文様が展開される。沈線爪形文は，3条から数条が1単位として密着して引かれている。まず口縁と上胴部に，それぞれ横位に引きめぐらし，この間に弧を向き合せた図柄を7個配する。この図柄の一端は開かれているが，上開と下開との2通りであって，これを交互に繰り返している。弧状に向き合った図柄のその開かれた頂点から，斜位の沈線爪形文がそれぞれ引かれる。これで，この口辺部の文様



第6図　X18Y15区出土土器実測図　S＝⅓

帯の中央に，うねった無文帯が走ることになる。もう１つ，向きあった弧状文の両側に三角形の無文部ができるが，ここには３・４条を単位とした沈線爪形文を弧に合せて引いている。

第７図上が，この土器の展開図である。弧を向き合せた図柄は，上開放と下開放とが交互に繰り返されているが，７単位であるため，図の左右両端に示したものは，同じ下開きになっている。土器製作者が，ここをどのように仕末をつけたか興味深いのだが，この部位は欠失している。しかし，当初から特に同じ単位を並べようとした痕跡は無いようで，７単位にした，あるいはなってしまった誤りであろう。

さて，この土器から思い起されるのは，新潟県鍋屋町〔寺村1960〕の土器（第７図下）[注2]である。胴部が羽状縄文であったり口辺部施文が浮隆爪形文であるなどの違いはあるが，器形・文様配置などに，強い類似点を指摘できよう。安田古宮の１とはやや異なるが弧を組み合せた図柄を３単位配する。図柄にも２通りの変化を与えてあるが，３単位では交互に繰り返すというわけにはいかぬ。斜位の線も，展開図の左から見ると，まず右下りに，次は右上りに引き，次は右下りにしたい所かも知れぬが，横位に引いて，うまくバランスを取っている。４単位にしておけば，楽に繰り返しで描けたのに，間の空間を広くでも取りたかったのであろうか，３単位をこれは意識的に計ったのであろう。土器の正面性も，あるいは考えてあるのだろうか。

第８図２は，外反した口辺部を無文のまま広く残し，胴部にＬＲの縄文を転がしている。３は，輪積み痕を表裏に残した無文中薄手の土器であるが，胴下半には４の羽状縄文が施されていると思われる。２・３は，微隆起線文こそないが，蜆ヶ森式の雰囲気を持っている。

第７図　Ｘ18Ｙ15区出土土器と新潟県鍋屋町遺跡出土土器展開図

次に，各区で発掘されたものと，表採品に簡略にふれておこう。

５～７は，口縁に三角形の印刻を交互に繰り返し，鋸歯状文を作り出しているものである。７は，大と小の鋸歯状文を組み合せている，波頂部に近い資料である。５～７は，ともに鋸歯状文の上下に爪形文を配し，下位には横引の細半隆起線を引いている。８は，これら鋸歯状文と組む胴部片であろう。４条を単位に細半隆起線を引き，その間を彫去している。

９・10は，無文地に浮隆爪形文を配したもの，11は１と同様の沈線爪形文である。

12は，ＲＬの縄文地に細い粘土紐を貼っている。

15～17は，半截竹管を浅く引いている。13も半截竹管を引いているが，強弱をつけていて一部爪形文状になっている。

14は，無文の口縁部に小突起を付したものである。

18～21は，縄文施文の胴部片で，18～20はＬＲとＲＬの縄による羽状縄文となっている。

22は，口辺部片で横なで痕の残る無文部の下位に羽状縄文を転がしている。

23は，器厚１㎝と厚く，表裏に太い半隆起線が引かれていて，中期中葉の土器片と推測される。出土区も，Ｘ９Ｙ８で他資料の出土地点と離れている。24も部厚く，また焼成の良い赤褐色の土器で，他の土器とは異質である。晩期に属するものと，推測しておこう。表採品である。

Ｂ安田古宮遺跡出土土器の位置づけ

Ｂ－１　富山・石川の中で

安田古宮遺跡出土の資料が，前期末葉に位置づけされることには，問題はない。従来設定されている式名〔高堀1965〕に当てはめてみれば，一括出土のうちの２・３は蜆ヶ森式に，１は福浦上層式に区分されるであろう。三角形印刻鋸歯状文を施した５～７も，福浦上層式になる。すなわち，２期に区分されるわけだ。

だが，図版３にみる資料１～３の出土状況からは，その一括出土の意味が問われなければならないにしても，時間的分離は難しいという感じを受ける。

この視点から，他遺跡の資料に当ってみると，蜆ヶ森式の中心的型式である微隆起線文系土器（以後微隆起線文型式と記す）と，無文地上に浮隆あるいは沈線爪形を施した土器（以後浮隆爪形文型式と記す）とが，緊密な出土状況を呈している例があることを知った。例えば，石川県中戸遺跡では，微隆起線文型式と浮隆爪形文型式の２者以外，出土が知られてはいない〔沼田1975〕。富山県囲山遺跡・小竹貝塚は，他型の資料も多く，中戸遺跡ほど単純ではないにしても，両型式の出土がある〔橋本1972〕。また，富山県古沢遺跡では，第２号土坑から２型式の土器が一諸に出土している〔小島幸1977〕。どうも，微隆起線文型式と浮隆爪形文型式の２者は，同一期のものと考えてもよさそうである。このような見方は，標式遺跡福浦の資料を報告している杉畠氏がすでにおこなっていて，２型式を合わせて福浦上層式と説明している〔杉畠1974〕。

もう１つ，三角形印刻鋸歯状文系（以後鋸歯状文型式）土器と微隆起線文型式の，同時存在の問題を考えてみよう。

先述の中戸遺跡には，鋸歯状文型式の土器はない。囲山遺跡でも，やはり出土が知られていない。微隆起線文型式と鋸歯状文型式の両者は，それぞれ蜆ヶ森式・福浦上層式の標式となってきただけに，どうも浮隆爪形文型式とほどの近接は無理のようだ。ただし，当安田古宮遺跡・小竹貝塚あるいは福浦遺跡・古沢遺跡では，鋸歯状文型式も出土している。実は，富山・石川の鋸歯状文型式は，２つに分けられる。１つは，資料が小さく図示できないが，口縁に鋸歯状文を施し，その下位の口辺から胴上部を，無文上に浮隆爪形文を配して飾るもの，もう１つは，胴上部を細

い半隆起線文（間を彫り取ったりもする）で飾るものである（第10図10）。前者がより古相を呈しているという感触を私は持っているが，小竹貝塚・福浦遺跡・古沢遺跡で採集されている資料は，いずれも前者である。この一事をもって，微隆起線文型式と鋸歯状文型式の古相のものとの同時存在を云々しようとは思わないが，ただ両者が近接した位置にあることだけは誤りあるまい。

以上をまとめて，安田古宮遺跡出土土器の位置づけを明確にしておこう。

北陸の前期末には，蜆ヶ森様式〔富大考古同好会1954〕がある。この様式は，その主要型式微隆起線文系土器の変化によって，今後細分される可能性を有するが，直立もしくはやや外反気味の口辺部に微隆起線を配した（第10図４），地方色の濃い型式を中心にしたものと考えられている。本遺跡出土の２・３は，この微隆起線文型式の最末期の型式で，１を伴う。１は，蜆ヶ森様式に代り，以後の新様式の１つの型式の特徴となる沈線爪形文を持っている。新様式（今仮りに福浦上層様式と呼んでおこう）の始まりであるが，古様式（蜆ヶ森様式）の１型式が，最後の生き残りとして存在していると考えておこう。

鋸歯状文型式については，これらのものと相近接した後続のものとするに，止めておこう。

さて，この鋸歯状文型式には，粘土紐を貼りつけた手法で飾る土器が伴うようである。口辺部の無文地上にソーメン状の粘土紐を貼ったものと，縄文地に同じく貼りつけたものとがあり，前者がより古拙さを見せている。縄文地に粘土紐を貼った後者は，往々細い半截竹管でその上を押し引いていて，いわゆる浮隆爪形文になっている。朝日貝塚には，前者無文地に粘土紐を貼ったものがなく，後者に限られていることからも，古手と新手という流れをそこに読み取ることができる。

さて，この鋸歯状文型式と無文地上に粘土紐を貼った二者は，共に口辺が外反していて胴上部に脹らみをもち，本遺跡の１と類似した形式である。口辺から胴上部までと文様帯の広いのも，一脈通ずるものがある。平縁あるいは台形状の突起をつけた口縁が目立つが，波状口縁もある。

朝日貝塚下層の土器群〔氷見高校地歴1964〕は，上述の鋸歯状文型式や無文地上粘土紐貼布の型式を失っていて，新規に縄文地上に細かく粘土紐を貼ったり，胴部に木目状撚糸文を施したりしていて福浦上層様式とは違いがあり，朝日下層式と呼ばれてきた。確かに朝日貝塚の資料は，形式がキャリパー形に類するものと円筒形が主体だし，波状口縁も姿を消している。器面を飾る施文手法も前記のように異なり，文様帯の構成も，福浦上層様式とは違う。朝日下層様式の器形・文様帯は，次の中期の新保様式に引きつがれていくものである。朝日下層様式と福浦上層様式の間には，前期的なものと中期的なものとの一線が引けそうである。

安田古宮遺跡の資料は，過渡期直前に位置し前期的な最後の姿を留めたものと，結論づけておこう。

B－2　他地域との比較

視野をやや広げ，安田古宮遺跡の土器と他地域との比較を簡単におこない，その位置づけをもう少しはっきりさせておこう。この基礎作業として，第10図を作ってみた。前期末の編年に関しては，今村啓爾の優れた論攻〔今村1974〕があり，『扇平遺跡』〔会田1974〕の詳細な観察などもあるが，筆者の目に入った実測図を諸報告書の中から拝借し，器形と文様帯に主眼を置きつつ北陸的な目から配列した。各報告者とは，意見を異にした部分もあろうが，御寛容をこう。

さて，安田古宮遺跡の資料から思いつくのは，新潟県鍋屋町遺跡の土器（第10図６，以後同図）である。先述の如く，器形といい文様帯といい，類似している。新潟県善光寺浜の土器（９）も似ている。鍋屋町の土器は，鍋屋町Ｉ式という〔寺村1960〕。Ｉ式はこの他に，蜆ヶ森様式と富山・石川で考えている微隆起線文型式や，浮隆爪形・鋸歯状文施文の土器などをも含むという。

第８図　各区出土の縄文土器（２～４はＸ18Ｙ15出土）
Ｓ＝½（２は⅓）

この見方は，先の私の考えにも援用できるわけだが，4・5の土器があまりにも蜆ヶ森様式の特徴を具備しているので，これらが鋸歯状文型式の土器に伴うという意見には，危惧感を持つ。[注3] I式が2分されるという見通しも述べておられるので，再考をお願いしたい。

無文地に浮隆（沈線）爪形文を施したもの，あるいは鋸歯状文を用いた土器は，長野県内にも多く当然それらは安田古宮や鍋屋町と相似た時期に位置するであろう（20・21）。無文地上浮隆爪形文施文の土器には，同一器面に小ボタン状突起が付される土器もあって，諸磯C様式とのかかわりが濃厚のようである。鍋屋町遺跡でも，諸磯C様式の土器が知られている（3）。19は，無文地を浮隆爪形文で飾っているので，ここに位置づけた。北陸では，無文地に浮隆爪形を施文するものは，以後にはないからである。23・24は，北陸には見当らない土器だが，長野県内では散見できるもので，鋸歯状文とは不可分の関係にあること（北陸では鋸歯状文は次期には無い），胴下部の変化は諸磯C様式の器形（12・15）などからの系列と見れないこともないこと，胴中央の把手は桜沢遺跡例（18）もあること，などを理由にこの期に置いた。

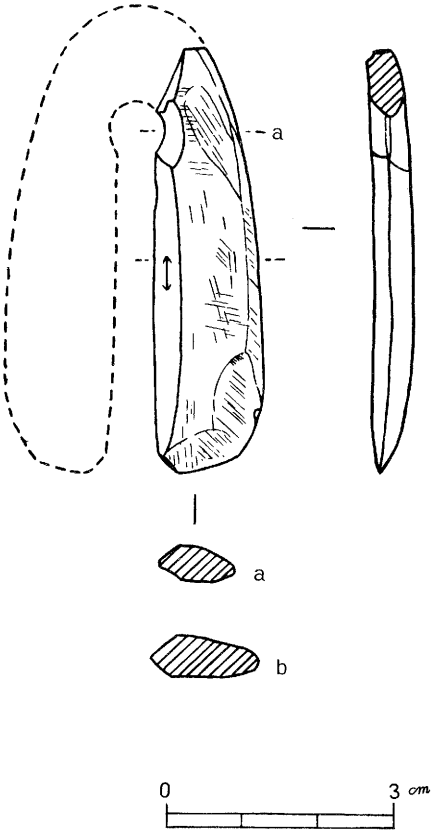
東京都には，この期の報告として『とけっぱら遺跡』がある〔今村1974〕。今村氏は，この中で前期末葉を4期に分け，それらを十三菩提様式ととらえている。その第1期（諸磯C式直後）に，とけっぱら遺跡の資料を位置させている。

鋸歯状文・浮隆（沈線）爪形文を通して，富山・石川から新潟・長野・関東地域へと，諸磯C様式の後半ないしは直後の時期を，横一線に並べることができた。

これに続くものは，北陸では良好な資料を得てはいないが，10・11の後続型式と縄文地浮隆爪形文型式が当るであろう。長野では，25～32，関東では十三菩提遺跡の33が比較される。

次いで，朝日下層式と呼んできた朝日貝塚の資料（34～38）が位置づけされる。これに類するものは，長野では41や43・45を，関東では48～52を上げれるであろう。この期の土器の多くは口辺部と胴部の区切りが器形でも文様の上でも明瞭で，その口辺部は外傾から立ちあがるあるいは内屈する。第10図の上段に並べたものとは，器形を違えている。この新器形は，26～33など，すでに一段早い時期に誕生している。逆に波状口縁器形は，このキャリパー器形が出現した時点で少なくなってしまうようであり，またかつて胴部を飾った横羽状縄文もほとんど姿を消しているようである。新らしいキャリパー形式は，その施文方とともに北陸の新保，長野の梨久保，関東の五領ヶ台式へと，引き継がれて行くのである。

さて，以上のような第10図の配置が了解されるとするならば，かつて鍋屋町的なものを十三菩提式と類似するといい，朝日貝塚の資料をもまた十三菩提式類似というような表現をした（私もそう表現してきたが）ことには，問題があるということになろうか。あるいは，諸磯C式以後五領ヶ台式以前を，広義の十三菩提式としてとらえようという今村氏の提案にも、その4段階の区切りには賛意を表するとし



第9図　玦状耳飾

ても，問題があるのではと指摘したいところである。

安田古宮遺跡の資料は，やや他地域に視野を広げて位置づけをしてみても，前期末葉にあってなお中期への傾斜の中にまだ組みこまれない様相を示しているものと理解できるようである。[注4]

以上，北陸という一地域から藪睨的にながめたのだが，問題も多々あると思う。しかし，器形と文様から，繁雑さをいとわず多くの型式を明確にしていくことによってこそ，前期末葉の解明に向えるものと考えての私の第１歩の作業である。

２．石　　器

２点の資料がある。１つは，蛇文岩礫を打ち割ったもの(図版６下)，その２は玦状耳飾である。

玦状耳飾

調査中Ｘ５Ｙ８で表面採集した。半欠品で左半分を欠失する。孔は上端に片寄り，側辺は胴張り状を示しながら下方に長くのびる。全体は，いわゆる日本鋏のような形となる。

現存する全長は 56.15㎜であるが，もとは62㎜前後あったものと思われる。縦断面形は下面の方にやや湾曲し，厚さ５㎜を測る。横断面形は下面が平坦で上面が丸みをおび，いわゆる蒲鉾形を呈する。重量は6.1ｇ。

孔径は７㎜前後で，断面くの字状をなし，二方向穿孔による。孔壁は平滑になっており孔内修正が施されている。穿孔は非連続回転運動によって行われている。切目が孔壁上端と接する部位まで及んでいるため，切目と孔の境は明瞭な稜線を残していない。

切目は長軸方向への前後運動によって作出されており，後にていねいな修正が施されている。切目及び下辺部は刃先のように鋭くなっている。

全体にていねいな磨き調整が加えられ，部分的に微擦痕を残す程度で美しいプロポーションを呈する。

材質は，良質の蛇紋岩で光線をあてると淡く透ける。

色彩は，上面で暗い緑[注5]に黄味白[注6]が縞状に混じる。下面は明るい緑を呈[注7]する。

次に，この玦状耳飾の編年等について若干記したい。

玦状耳飾には円形，楕円形，正方形，三角形など数種のバラエティがある。樋口清之氏は，かつてこれをＡ～Ｆ類〔樋口1933〕あるいはAa～D型〔樋口1939，1940〕に分類された。安田古宮遺跡例はＡ類またはAa型に該当する。樋口氏はこれを最も古い形態と考えられたが，伴出土器型式の研究が進んだ今日では否定されている（高山氏〔1963〕が特に本型式について論じている)。

現在は江坂輝弥氏の「玦状耳飾は前期初頭のものは肉厚で，断面が円形に近く，直径３㎝前後の小型なものが多い。これが前期の後半になると……（筆者略）……肉薄なものとなり，中期以降の遺跡から出土のものは，平面形が円盤形をなさず，下半部が下へ長くのびるものがあらわれる」〔江坂1964〕という見解が一般的である。しかし，これは在り方の一面を示すにすぎない〔藤田1970〕。

安田古宮遺跡例でもみられるように「下半部が下へ長くのびるもの」は中期を遡って存在する。小杉町上野遺跡でも前期末葉に比定できる資料がある〔橋本1972〕。前期後葉の蜆ヶ森式期の単純遺跡である富山市平岡遺跡〔小島1968〕で，青江清行氏は類似品を採集している。それは安田古宮遺跡例よりやや小形で，縦断面が下面の方に湾曲し横断面は蒲鉾形を示し，蛇紋岩製である。

このように県内にあっては，いずれも前期後半に所属するようである。断面形が蒲鉾形を示す特色は攻玉遺跡の玦状耳飾編年第Ⅲ期〔藤田1970〕に該当するものであり，この点からも容認できる。

ところで，この型式の大きな特徴の一つに孔が上端に片寄ることがあげられる。このような傾

向は白馬岳を中心とした攻玉遺跡〔寺村1967〕のうち前期中～後半の上原遺跡，女犬原遺跡，それに有明山社大門北遺跡〔小松他1969〕に認められる。特に女犬原遺跡ではここで取り上げている型式のものがある〔藤森1935〕。

高山純氏は、かつて愛媛県山神（晩期），滋賀県滋賀里（晩期滋賀里式），岡山県里木貝塚（中期里木II式），福岡県沖ノ島社務所の傍の遺跡（中期）を挙げて中期以後この型式の玦状耳飾が現われ，それが晩期まで存続していたと考えられた〔高山1963〕。また秋田市下堤遺跡でも大木8a式期に属すもの[注8]が報告されている〔富樫・鍋倉1972〕。

このようにみてくると，白馬岳を中心とする地域（長野県北部及び隣接する新潟・富山両県）に他地域より遡る例やそれに系統づけられるものが集中している。[注9]もとより，この地域は前期初頭以来，前期全般にわたって攻玉遺跡が営まれており，いわゆる飾玉文化圏を形成している。このような実情からすると「下半部が下へ長くのびるもの」の出現にこの文化圏が大きく係わっている可能性が高いといえよう。

V．まとめ

安田古宮遺跡から出土した土器は，ほとんどが縄文時代前期末葉のものであった。

その中には，蜆ヶ森様式の流れを組む土器も見られるが，すでに新しい沈線爪形文を主文様にした福浦上層様式期に一歩入った期の土器群と理解したい。ただし，これらを全く単一期と考えるのか，あるいは相近接した2期と考えるべきか，現時点では明確な答えは出せない。2期に分けれるのではという見通しはあるが。

安田古宮遺跡出土の土器は，朝日貝塚下層様式が器形や施文法の上ですでに中期への傾斜を始めているのに対し，いまだ前期的な姿を保ったものであること，またそれは他地域との比較からも言い得たことをつけ加えておこう。

前期末以外の資料は，中期中葉と晩期のものと推定された細土器片が1点ずつあっただけで，この安田古宮の地は，縄文時代にはその後ほとんど居住地として選ばれなかったかのようである。

玦状耳飾が1点採集されたが，土器が前期末葉のものに限られているので，その所属期を明確にすることができた。

また，土坑についても，遺物を伴った坑は1例のみであったが，やはり前期末葉に位置づけてもよいであろう。吉峰遺跡や古沢遺跡でも，ほとんどこの安田古宮と形も時期も似た例が知られていて，これらが前期末葉の特徴的遺構であるともいえる。

注1．第6図1（X18Y15），第8図2（X18Y15），同3（X18Y15），同4（表採），同5（X17Y12），同6（X5Y19），同7（X5Y19），同8（X6Y24P），同9～13（表採），同14（X5Y20），同15（X5Y15），同16（X6Y24），同17（X6Y24），同18（X5Y15），同19（X5Y15），同20（X5Y19），同21（X5Y15），同22（X5Y15），同23（X19Y8）

注2．この展開図は，写真から作図したもので，単位性を見るための概念図と理解されたい。

注3．逆に，鍋屋町遺跡には，鋸歯状文型式と微隆起線文型式の結びつきを示す土器もあるのだが，〔寺村他1959〕の第6図29・〔中村1966〕図版第15図左中央などがそれである。

注4．25～32，あるいは十三菩提遺跡の33などを転換期として重要視したが，北陸には類する資料が少ないこともあって，この位置づけには不安も感じている。

46・47の土器は，中村氏がいう〔中村他1969〕鷹島様式であろうが，朝日貝塚にも類品が1点ある。器形や文様帯の面からここに位置づけてみたが，中村氏の考えとは違いが出てきている。

注5．Munsell Collor System 5.0 G（色相），3.0（明度）／2.5（彩度）　一般色名暗い緑（dark green）

注6．2.5Y，9.0／2.0　黄味白（yellowish white）

注7．3.0G，6.0／3.5　明るい緑（light green）

注8．富樫泰時氏教示による。

注9．山形県吹浦遺跡や，群馬県住吉遺跡では前期に遡るものがある。また，里木貝塚例は里木II式に誤りなく伴うものであろうか，何となれば下層には里木I式（前期末）が出土しているからである。今後検討したいところである。しかし，現在前期全般を通じて系統的に玦状耳飾の変遷をたどることができ，その中でこの式が登場してくるのはいわゆる飾玉文化圏をおいて他にない。

参　考　文　献

ア．会田　進他 1974　『扇平遺跡』岡谷市教育委員会

赤星直忠・塚田明治　1973　『横浜市室ノ木遺跡』横須賀考古学会研究調査報告２

イ．今井康博他　1974　「池辺第４遺跡」『港北ニュータウン地域内文化財調査報告Ⅳ』

今村啓爾他　1972　『宮の原貝塚』武蔵野美大考古学研究会

1973　『霧ヶ丘』武蔵野美大考古学研究会

1974　『とけっぱら遺跡』武蔵野美大考古学研究会

ウ．梅原末治　1935　『京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告』

エ．江坂輝弥　1964　「装身具」『日本原始美術２』講談社

カ．金子忠雄　1975　『富山県滑川市森野谷遺跡調査報告書』滑川市教育委員会

コ．小島俊彰　1968　「北陸における縄文前期末の様相」『信濃』第20巻第４号

1974　「北陸の縄文時代中期の編年」『大境』第５号

1977　「珠洲郡内浦町松波新保遺跡発掘資料再見」『石川考古学研究会々誌』第20号

小島幸雄　1977　『富山市古沢遺跡概要調査報告書』富山市教育委員会

小松　虔他1969　『有明山社』長野県考古学会

サ．坂上克弘他　1974　「東方第７遺跡」『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』Ⅳ

ス．杉畠孝博　1974　「酒見サンノハザマ遺跡」『富来町史資料編』

鈴木孝志　1957　「長野県北安曇郡松川村鼠穴字桜沢遺跡」『考古学雑誌』第42巻第２号

タ．高堀勝喜　1965　「縄文文化の発展と地域性――北陸――」『日本の考古学』Ⅱ

高山　純　1963　「四国で発見された玦状耳飾」『あるかいあ』２号　三考会

テ．寺村光晴他　1959　「新潟県中頸城郡柿崎町鍋屋町遺跡概報」『上代文化』第29輯

1960　『鍋屋町遺跡』柿崎町教育委員会

1967　「縄文時代前期飾玉生産の一考察」『和洋女子大学紀要』第12号

ト．富樫泰時・鍋倉勝夫　1972　『概報第４次下堤遺跡』秋田市教育委員会・秋田考古学協会

戸沢充則　1970　『後田原遺跡』岡谷市教育委員会

富山県教育委員会　1972　『本江・広野新遺跡調査概報』富山県教委・滑川市教委

富山県立氷見高校地歴クラブ　1964　『富山県氷見地方の考古学遺跡と遺物』

富山大学考古学同好会　1954　『蜆が森貝塚調査報告書』富山県教育委員会

ナ．中村孝三郎　1966　『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館

中村貞史他　1969　『鷹島』

滑川市教育センター　1971　『滑川市の自然』滑川市教委・滑川市教育センター

ヌ．沼田啓太郎　1975　「金沢市中戸遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌』第18号

ハ．橋本　正1972a　『富山県埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ　富山県教育委員会

1972b　「図録　縄文時代石器」『富山県史　考古編』富山県

ヒ．樋口清之　1933　「玦状耳飾考」『考古学雑誌』第23巻１号　日本考古学会

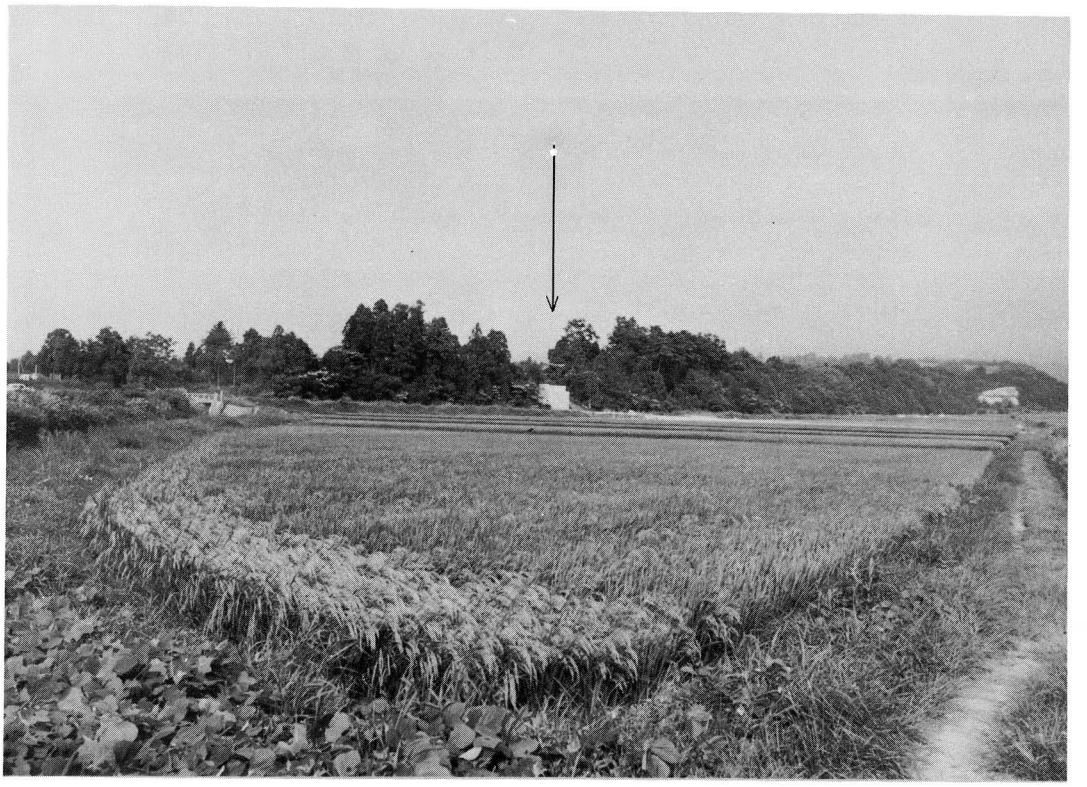
1939・1940「日本先史時代人の身體装飾」『人類学・先史学講座』13・14

樋口清之・麻生優　1971　「十三菩提遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』２　神奈川県教育委員会

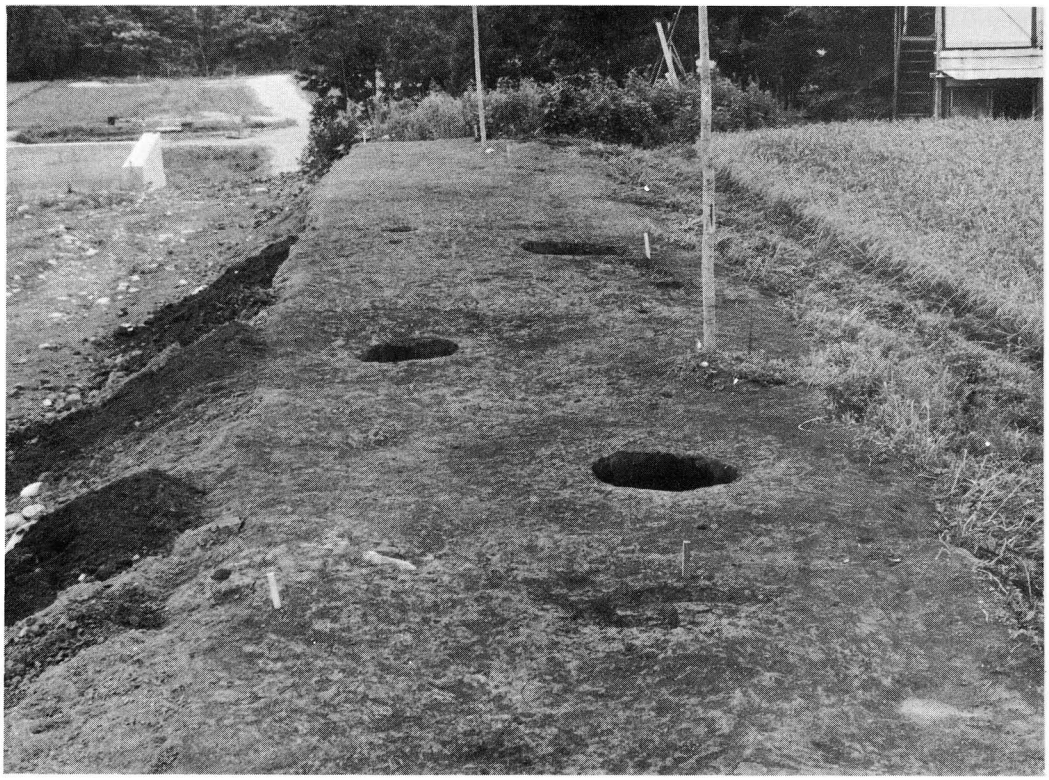
フ．藤田富士夫　1970　「攻玉遺跡からみた玦状耳飾の編年」『日本玉研究会会誌』1
藤森栄一　1935　「山口飾玉襍記」『考古学』第六巻第七号　東京考古学会
1956　「各地の縄文土器――中部――」『日本考古学講座』III
1965　『井戸尻』中央公論美術出版
1966　「中部高地の中期初頭縄文式土器」『富士国立公園博物館研究報告』第16号
ム．武藤雄六　1968　「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』第4巻第1号
村田文夫　1970　「多摩丘陵東端発見の縄文前期末葉から中期初頭の土器について」『古代』第53号
室岡　博　1972　『頸城地方の海と海底・海浜遺跡』上越市立総合博物館教養選書第1篇
ヤ．柳井睦・神保孝造　1975　『富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概報』富山県教育委員会
吉村進・友野良一他　1972　『羽場下・舟山』　駒ヶ根市教育委員会

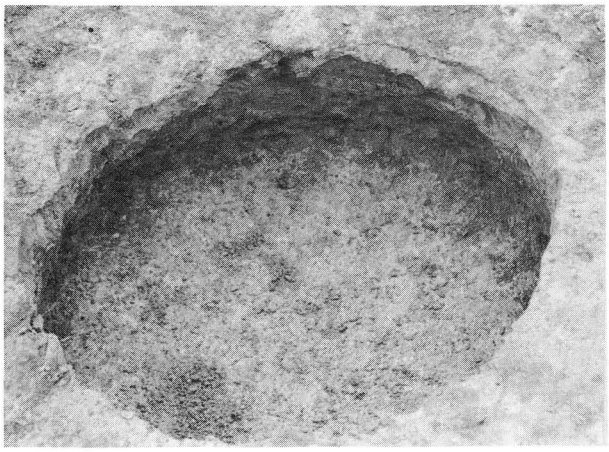
表1　第10図土器実測図の引用文献表

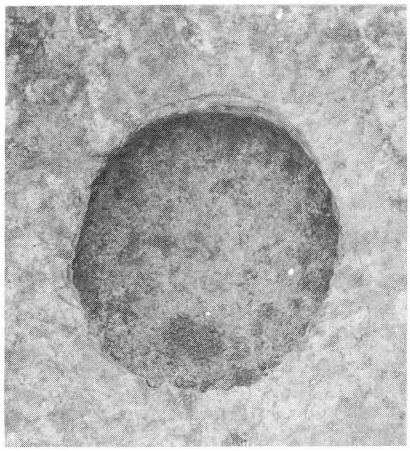
土器番号	遺跡名	文献など
1	富山・安田古宮	本書
2	同	同
3	新潟・鍋屋町	寺村他　1960
4	同	同
5	同	同
6	同	同
7	同	同
8	同	柏崎図書館
9	新潟・善光寺浜	室岡　1972
10	富山・吉峰	小島　1974
11	富山・上野	同
12	長野・下島	藤森　1956
13	長野・後田原	戸沢　1970
14	長野・牛久保	鈴木　1957
15	長野・籠畑	藤森　1965
16	長野・扇平	会田他　1974
17	長野・籠畑	武藤　1968
18	長野・桜沢	鈴木　1957
19	長野・扇平	会田他　1974
20	長野・籠畑	武藤　1968
21	同	同
22	同	同
23	長野・羽馬下	吉村他　1972
24	長野・籠畑	武藤　1968
25	同	同
26	長野・扇平	会田他　1974
27	同	同
28	長野・籠畑	武藤　1968
29	同	同
30	長野・扇平	会田他　1974
31	長野・晴ヶ峰	藤森　1956
32	長野・蟹掘	梅原　1935
33	神奈川・十三菩提	樋口他　1968
34	富山・朝日貝塚	東大人類学教室
35	同	氷見高校
36	同	東大人類学教室
37	同	氷見高校
38	同	東大人類学教室
39	富山・上野	富山県教委
40	同	同
41	長野・踊場	藤森　1956
42	長野・扇平	会田他　1974
43	長野・広畑	藤森　1956
44	長野・籠畑	武藤　1968
45	長野・羽場下	吉村他　1972
46	長野・籠畑	武藤　1968
47	神奈川・東方第7	坂上他　1974
48	同	同
49	神奈川・室ノ木	赤星他　1973
50	同	同
51	神奈川・野川字・西耕地	村田　1970
52	神奈川・向岡中学校	同
53	神奈川・霧ヶ丘	今村　1973
54	石川・新保	小島　1977
55	富山・野島大門	小島　1974
56	石川・新保	小島　1977
57	同	同
58	同	同
59	富山・野島大門	小島　1974
60	長野・梨久保	藤森　1956
61	同	同
62	長野・籠畑	武藤　1968
63	同	同
64	神奈川・宮の原	今村他　1972
65	神奈川川・池辺第4	今井他　1974
66	神奈川・宮の原	今村他　1972
67	同	同



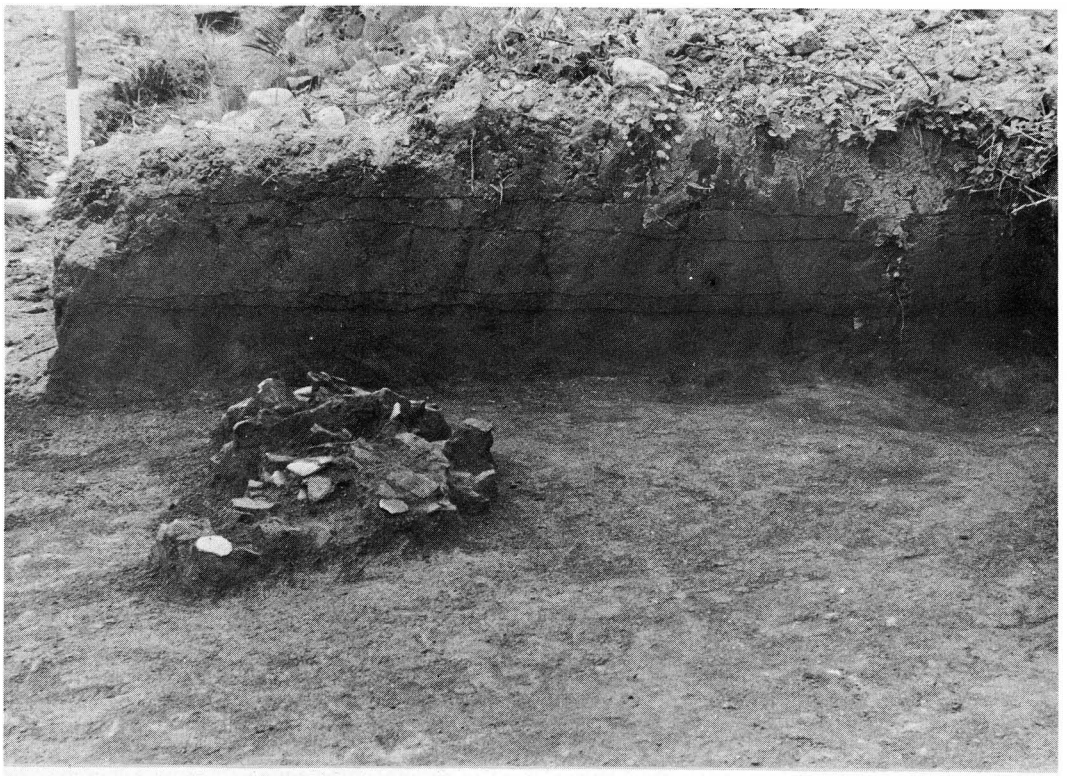
図版Ⅰ　上　遺跡遠景　　下　発掘状況





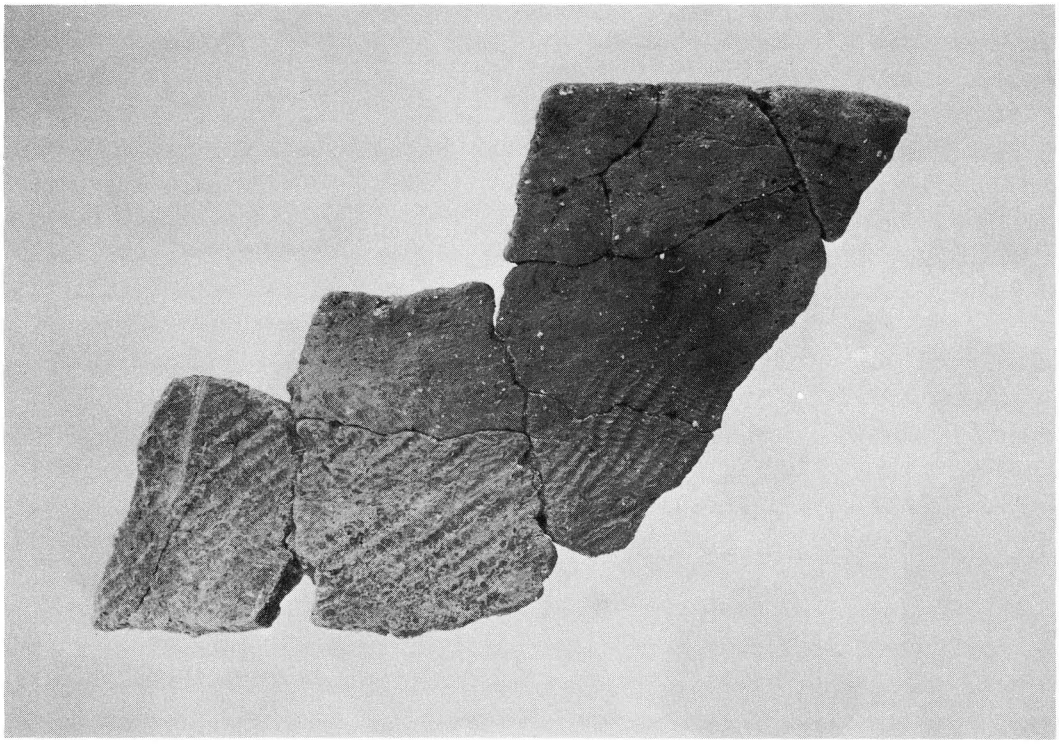


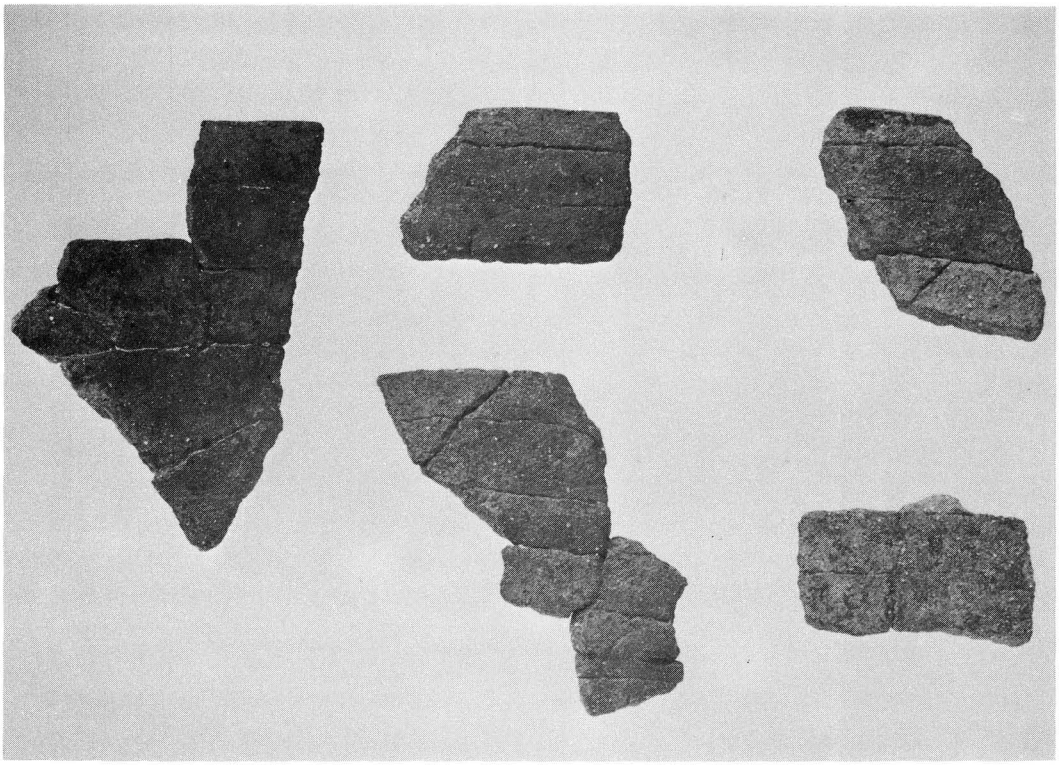
図版２　上　西側区全景　　下左　ピット６　　下右　ピット５



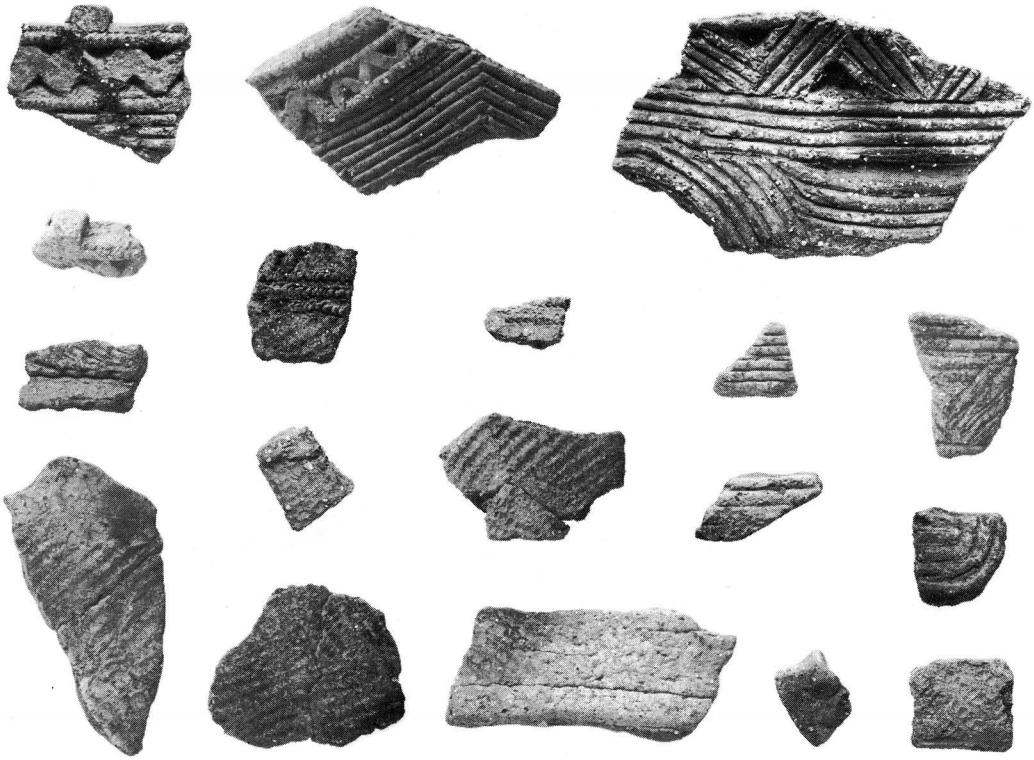
図版3　　X 18 Y 15 区土器出土状況

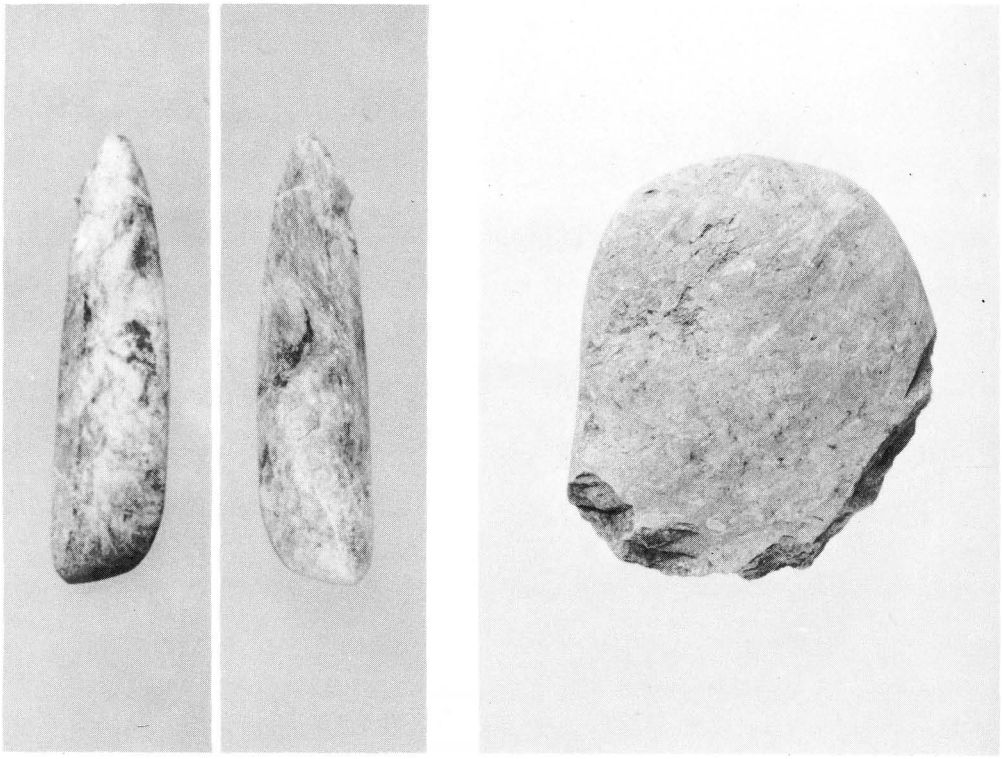
図版 4　　X 18 Y 15 区出土土器





図版5　X 18Y 15 区出土土器　S＝⅔





図版6　上　各区出土の縄文土器 S＝½　下　玦状耳飾 S＝1/1と蛇文岩礫　S＝½

富山県滑川市
安田古宮遺跡発掘調査報告書

発行年月　昭和53年2月
編　　集　滑川市史編さん係
発　　行　滑川市教育委員会
印　　刷　㈱いろは堂印刷所